



内子座 藝於遊

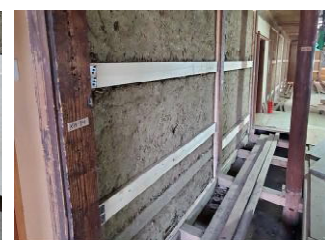


壁補強板取付用付け貫の取付

令和8年6月後半から、壁補強用のポリカーボネート板を取り付けるための下地材の取付が始まりました。付け貫と称される木材を補強される壁に取り付けていきます。これは補強を予定している壁のおよそすべてに取り付けられていくとのこと。まず着手したのは、舞台北側の内壁で、柱の両サイドに金具が取り付けられ、そこへ木材がはめ込まれていきます。内子座の壁は真壁づくりで厚みはそれほどないため、付け貫を加工するのでもミリ単位での細かい調整をしながら作業が進みます。ここでも職人技が光りを放ちます。



つけ貫取付の様子(7月1日撮影)



壁の追加解体と補修

昨年度より、壁の解体とともに土や竹小舞の状況などを調査していましたが、その結果、追加の解体や痛みのひどい竹小舞の取替や補修が施されることになり、作業が始まりました。暑く狭い場所での作業に汗が流れます。解体は最小限の範囲で行われ、解体された土の一部は再利用されます。内子座自身も引き継がれていくようで、何だかうれしいですね。



◀金具にあわせて加工された下地材(左上)と加工している様子(左下)。The職人技！▲右上は舞台北側の様子。壁に2本の付け貫がついている。



焼印 完成

保存修理工事で新しくなった木部に付けられる焼印が完成しました。内子座では、昭和58～60年の復原修理工事やその後の活用整備工事においては単に西暦の年号のみの焼印が押されていましたが、重要文化財の保存修理ではこういったスタイルが一般的だそうです。工事完成後にどこかで見られるかも？

